

第 16 回 集住の単位

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て 2008 年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011 年 4 月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

いま雪の三陸海岸から大阪へ向かう車中にある。昨日までの豪雪とはうって変わり今日は青空が広がっている。雪化粧した山々がリアス式海岸の湾を取り囲み、海と山がキラキラと光ってみえる。寒さが残る中、人々は早朝から雪かきに勤しみ、路肩に雪が積みあがる。瀬戸内のぬくぬくとした気候の中で育った私などは頭が下がる思いである。

さて、訪問の目的は仮設住宅にお住まいの方へのヒアリング調査である。一つは 80 戸の仮設住宅（A 仮設と表記する）、もう一つは 174 戸の仮設住宅（B 仮設）である。今回はその中から見えてくる「集合の単位」について考えてみたい。

結論から述べると、小規模な A 団地では団地全体に顔なじみの関係性が築かれコミュニティが醸成されていたのに対して、大規模な B 団地ではコミュニティ活動が行われているものの、限定された閉鎖的な関係性しか築けていなかった。

まず、A 団地について概観してみる。A 団地は震災後 4 ヶ月が経過した 2011 年 7 月に入居が開始され、同一地区からの転居が多い。コミュニティ活動は、元学校の先生を中心に行われており、防犯活動や見守り活動、集会所での囲碁教室など様々なイベントが自発的・継続的に行われている。住民同士の結びつきも強く会えば必ず挨拶するなど住民同士が顔なじみの関係になっている。

一方、B 団地は町内でも最も早く入居が進んだ仮設住宅であり、4 つの地区の住民が混在している。コミュニティ活動は元行政職員を中心に組織化され、手芸教室やカラオケ教室などが開催されている。しかしながら、いずれも特定の

少人数の住民だけを対象とした活動となり、住民相互の関係性は、誰がどこに住んでいるかよく分からないという状況であった。

このように両団地ともに震災後の危機的な状況の中でリーダーが現れ、コミュニティ活動を推進していこうという動きが見られた。どちらともリーダーは教育関係者や行政職員など「公」に属していた人々であり、これまでの経験や立場が自発的な行動に結びついたと考えられる。また、A団地のヒアリングの中から「見知らぬ人同士の共同生活はうまくいかないが、集落のような関係性の中での共同生活はうまくいくのでは」というコメントがあった。個人が独立し平等である関係性の中においては、それぞれが干渉し合わないよう振る舞うが、人々を取りまとめる仲介者・調停者がいる場合には積極的な関わりを持ちやすいというのである。このような調停者の存在は他の居住者と同じ立場でありながらも敬われる存在、いわば昔の村長（むらおさ）のようなものであると考えられる。まさに、都会の分譲マンションが閉鎖的な個に向かうのに対して、集落ではソトに対して開くことを許容するという考えにも通じるものがある。

その後の展開については団地の規模や集団の属性（同一町民か否かなど）により異なる。小規模な団地では、人間関係の面的な広がりや深まりがみられたが、大規模な団地では関係性が限定的になりがちであった。

ここで話題を高齢者施設に移そう。これまでの仮設住宅での話題は、大規模な集団処遇から小規模なユニットケア・グループホームケアへと転換と結びつく。ユニットケアでは、入居者同士や入居者とスタッフが顔なじみの関係性を築けるように意図的に集団の規模を小規模化してきた。10人程度であれば認知症高齢者の方も名前は覚えられなくとも、いつも一緒にいる人だと認識しやすい。集団の規模には、「顔なじみの関係性」が一つ単位になると考えられる。

次に高齢者施設における仲介者・調停者は誰かという面について考えてみたい。介護職員こそが調停者であるという考えもあるが、施設において職員－入居者の関係性は垂直関係にあり、いわば「支配する・支配される」という構成になりやすい。仮設住宅のケースからもみられたように、調停者は入居者との同一の関係性にあることが望ましい。近年はあまり見られなくなったが、特別養護老人ホームの中においても特別な存在感を持った入居者がおり、入居者の間に立ち調停役を担っていた。入居基準が重度者に特化される中でこのような関係性が見られなくなっているが、施設を「集住する住まい」として位置付けていくためには、入居者同士の人間関係を築けることが望ましい。

今後、被災地においては復興公営住宅の建設と入居が進んでいく。ぜひとも人々の関係性が醸成される住まいになってもらいたいと切に願うばかりである。